



道路や橋、トンネルなど高度成長期に建設された土木施設、インフラの維持管理が、今、国全体の大きな課題となっています。ロボットカメラや飛行ロボットを使って点検する技術が公開され、行政や民間の技術者が見守りました。

実証実験が行われたのは、西海市大島町と崎戸町を結ぶ中戸橋です。27日は、長崎大学を始めとする大学や、企業などが開発にあたったロボットカメラなど先進的な点検の技術5件が公開されました。こちらはコンクリートをたたいて内部の空洞などを調べる打音検査の機器や、車輪を、ドローンに取り付けた飛行用ロボットです。人がなかなか近づけない場所に飛んで行き、車輪を必要な場所に当てて走行することで、データを収集して記録します。残念ながら27日は、現場は風が強く吹きつけ、実際に飛ばすことはできませんでした。実験を見守るのは、道路や橋、トンネルなど、私たちの生活を支えるインフラの維持管理に日ごろから携わっている行政や企業の技術者などです。日本では、1960年代の高度成長期にインフラの整備が大きく進みましたが、今、国も地方自治体も財政が極めて厳しい中で、その多くが老朽化しています。2012年には、中央自動車道の笹子トンネルで、天井が崩落し、通行中の車が巻き込まれる大事故が起きました。県と長崎大学は、市民も対象に、道路などの異常をチェックできる人材の養成を進めています。早めにこまめな補修を行うことで、インフラを長持ちさせようという節約作戦です。一方で、国は、内閣府を事務局に、複数の省庁や法人・企業・大学と連携し、先端の情報技術やロボット技術を駆使して、人手に極力頼らずに維持管理の負担を最小限に抑えるシステムを構築しようとしています。長崎大学インフラ長寿命化センター 松田浩センター長「あまりお金をかけず、すぐにも役立つような研究を実験」国は、今後それぞれの技術を組み合わせて、ビジネスとして成り立つような運用を目指しています。

